

## はじめに

美しさについて、人は古代より、それを考え、論じ、記述してきた。記述する術がなかった昔、あるいは術をもたない文化においても、人は美しいものに対し、憧れ、尊び、喜び、また、自らの手で創り出してもきた。

哲学者シモーヌ・ヴェイユは「労働者に必要なのは、パンでもバターでもなく、美であり、詩である」と述べ（今村、2010）、美学者の今道友信は「美は人間の希望である」と語った（今道、1969）。美は生きるに当たって贅沢品のように見えて、実は欠かせないものなのかもしれない。マックス・プランク経験美文学研究所の所長 Menninghaus（2003）が言うように「美はそれ自身が報酬となる」からだろうか。

美しさは、誰もが体験する印象である。芸術作品に限らない。雄大な風景、風に揺らぐ花、整った書棚、まっすぐに伸びた姿勢、華麗なシュート、崇高な行為、シンプルな数学の公式、立派な人柄。その対象は大小の事物の外観から人の行動、内面にまで及ぶ。紀元前 416 年に書かれた「饗宴」においてプラトンは、ソクラテスが巫女ディオティマから聞いた話として、美には 4 つの段階があると語らせている。第 1 段階は目に見える「肉体の美」、続いて、ふるまいや心に関する「魂の美」、さらに、普遍的な真理を追求する「知識の美」、そして、究極の美の形としての「美のアイデア」。美は求める者に応じ、対象を変えて、さまざまな姿で現れる。

しかも、文化が異なれば、美も変わる。時代が変われば、美もまた変わる。黄金比が好まれた時代もあれば、そうでない時代もあり（Höge, 1997）、丸い車が流行るときもあれば、四角い車が好まれるときもある（Carbon, 2010: 8.6 参照）。利休のような目利きが現れれば、雑器の意味も変わり、真の芸術家は常に改革者として新しい時代の価値を生み出す（3.13 参照）。

こうした事例が示すことは、「美」はいつの時代、いつの場所でも、1 つではなかった、ということである。

それにもかかわらず人は古来より、美には普遍性があると直感してきた。プ

ラトンは、美は状況に依存する感覚的・感性的なものではなく、絶対的なものだと捉えた。Kant (1790) も「ある個人に対してだけ快いなら、彼はそれを美と呼んではならない」と述べた。彼は感覚的快と美とを区別していた。画家の岡本太郎は「美しいというのは無条件で、絶対的なものである。見て楽しいとか、ていさいがいいというようなことはむしろ全然無視して、ひたすら生命がひらき高揚したときに、美しいという感動がおこるのだ」と述べている (岡本, 2002)。ここには絶対的な美が示されている。

かつて知能検査には女性の顔の美醜を判断させる項目があった。女性の顔の美醜を問題にするという性質から、日本では2001年の改訂版から正式に廃止された。ここで注目すべきは、美醜の判断が検査の課題になりえたことである。つまり、美の判断には正解があると考えられてきたことである。美が個人の嗜好 (taste) に基づいて決まるならこの検査は成り立たない。課題となりえたのは、社会に共通して認められる美しさがあったからだろう。しかも、その美を判断できる能力が生きていくに当たって必要だと考えられたからだろう。それは均整のとれたものや整頓されたものに美を見出すことのできる感受性であり、それがコモンセンス (共通感覚, 常識) として求められた、ということになる。Kant は「無人島では人は美を求めない」と述べた。美を個人の趣味の問題に帰した Kant でさえ、美の背景 (もしくは前提) に社会を仮定していた。美の「主観的普遍性」は社会を前提としている。

一方、Darwin (1871) は集団や文化によって装飾や変形が多様であること、しかし同時に、身を飾るという習慣は普遍的であることに注目し、「何が魅力的かということに関して、個人間と文化間においてさまざまな差異がある。しかし、同時に驚くべき同意の核も存在する」と述べた。現代の脳科学も、美しいと感じるものは個々人で異なっている、美しいと感じているときに活動する部位は共通することを指摘している (Kawabata & Zeki, 2004: 第6章参照)。美の普遍性は、社会を越えても存在している。

つまり、美は1つであって、同時に、1つではない。もっとも、1つの「美」と、多様な「美しさ」があるとして、美と美しさを区別すべきかもしれない。いずれにしても、美には多様性と共通性・普遍性とが共存する。

ところで、美は人を惹きつけるが、よさと同様、それに近づくのをためらわせもする。「美」という漢字は「善」や「義」とともに、羊という文字を部首に冠している。羊は生け贄に使われる動物である。犠牲の意味を含んでいたと

考えられる。美、つまり「大きな羊」は美学者の今道（1969）がいうように、「大いなる犠牲」でもあった。言語学者の白川（2003）によると、美は成熟した羊の美しさを示し、犠牲となる羊は欠陥がなく、完全であることを求められたという。古代中国では、美は完全なるものでもあり、社会的な犠牲を払う倫理的行為でもあったのだろう。古代ギリシャにおいても同様であった。プラトンは「饗宴」の中でソクラテスに、美を求めることは善きことを求めることだと語らせており、プロティノスも美は善のスクリーンだと述べている。長らく、美と善には通底するものがあり、完全で絶対的なものとされてきた。面白いことに、最近の脳科学でも美を感じる場所と道徳的なよさ、つまり善を感じる場所は共通していて、いずれも眼窩前頭皮質の関与が指摘されている（Kawabata & Zeki, 2004; Tsukiura & Cabeza, 2011）。

形而上学の世界で、美と善が切り離され、美と崇高が分離された後も、人は美にどこか近寄りがたい緊張感を感じてきた。理想を前にしたときの、身の引き締まる思いは、快や嗜好には見られないものである。三浦はこの感覚を、美が内的感情の発露ではなく、外的対象に対する抑制的な評価にあるからだと考え、「距離感」という言葉を用いた（三浦, 2016）。Menninghaus（2003）は美を「昇華された快」と呼び、Kant（1790）は「無関心の快」と表している。後者はむしろ、「無利益の快」と訳すべきかもしれない。いずれも、美は個人的な利害や関心から切り離された観照的な態度が前提であることを示唆している。美は常に遠くにあり、ときに努力や犠牲を伴って得られるものとして直感されてきたのだろう。

「美学（Aesthetics）」では、そうした美とは何かを追求してきた。しかし、本書は「美」ではなく、「美感」に焦点を当てている。美感とは、一般的な使い方では（本書での使い方は第1章参照）、「美しいと感じること」あるいは「美に対する感覚・感受性」を意味する言葉である。したがって、ここでは、美に対する感受性をもって、対象を美しいと感じる「人」を主語（subject）として、人は何に美を感じ、何を美しいと思うか、それはなぜかを考えることになる。さらに、より重要なこととして、その作業を通して、人はいかにして美を感じるのか、つまり、美を感じる際の特徴や処理について考えることになる。そのことによって、個々の美の向こう側に共通する普遍的なるものを捉えようというのが本書の主眼である。言い換えると、本書は美を切り口として、知覚、感性認知、思考といった心の活動の統合的なあり方を考えようというのである。

結果的に、この作業が対象美とは何かを垣間見させてくれることにもなるだろう。

ただし、本書は美あるいは美しさのみを取り扱うものではない。快や嗜好、かわいさや面白さなどの肯定的な印象や感情、さらには不快感や嫌悪感、醜や違和感などの否定的な印象や感情にも言及していく。たとえば、美と醜は大きく異なるように思えるが、人は醜にも魅力を感じ、ときに滑稽という形でそれを乗り越え (Rosenkranz, 1853: 3.11 参照)、価値を見出すことがある。肯定的評価と否定的評価は常に対極というわけではない。特に、魅力では対極的なものが同時に複合感情として表れることが少なくない。一方、快不快は基本的な感情で、美に限らず、多様な印象の基盤となる。逆に、面白さは知的判断として、独自の性質をもって現れる (Silvia, 2012: 3.11 参照)。こうした多様な印象や評価あるいは感情は、心理学では評価性因子 (2.4 参照) あるいはヘドニックトーン (3.1 参照) と呼ばれてきた。本書は、したがって、評価性因子やヘドニックトーンについて議論するものである (1.1 参照)。しかし、このような旧来の表現を使わず、美感と総称したことについては、第 1 章でその理由を述べることにする。

人が何らかの印象を喚起し、対象の評価判断を行うとき、対象の多次的な物理特性に加え、そのときどきの覚醒度や注意が影響する。学習や経験でかつて得た記憶も関与する。個人を取り巻く文化や社会、時代や風土などの外的要因も関わってくる。美感は常に包括的な知覚として捉えられ、統合的な認知として判断される。そうした知覚や認知に基づく印象喚起や評価判断がどのような要因によってどの程度、規定され、どのように統合されて行われるのかを、それぞれのテーマに沿って考えることになる。

人には誰も美しいと感じる景色があり、好きなもの・嫌いなものがある。その理由も自分ではわかっていると思うかもしれない。しかし、たとえば、下條 (2008) は、少しだけ長く見た方の顔写真を好ましいと判断することを示し、Cutting (2003) は、流通量の多い芸術が好まれることを指摘した (8.5, 8.6 参照)。理由を聞かれたとき、好ましく思うのはただ長く見ていたからだとか、しばしば見ていたからだと思うだろうか。Maass (2007) によると、右利きのひとは左から右に流れるサッカーのシュートを美しいと感じ、Casasanto (2009) によると、右側に書かれた履歴書の人物を優秀だと判断する傾向があるという (3.7 参照)。この判断が利き手と関係していることに果たして気づく

だろうか。Stieger & Swami (2015) は、黄金比はそれに関する知識をもっている人だけが、しかも、意識して判断したときだけに、好ましく思うものだと指摘した (1.3 参照)。知識をもっているから美の判断にバイアスが生じているという認識が当人にあるだろうか。一方で、特定の物理特性が、美しさと魅力、醜さや不快感を引き起こすこともある。どのような特性がどのような印象を喚起し、それはなぜなのだろうか？ 本書ではそうした問いに、古典的な研究から最新の知見まで、あるいは形而上学的な思索から脳科学的な成果までを紹介して、答えていくことになる。

本書は8章より構成されている。第1章では美感 (aesthetic science) という言葉の源流をたどり、主体と客体 (対象) からの両アプローチがコインの両面のようなものであって、対象と主体という第2章と第3章の分け方が便宜的なものに過ぎないことを強調する。また、美の実証科学の出発点である Fechner の黄金比研究に触れ、その後の展開を振り返る。黄金比研究は第2章の「対象からのアプローチ」の序論ともなるが、第3章の「主体からのアプローチ」による研究も含まれる。第2章の「対象からのアプローチ」ではゲシュタルト心理学の「よさ」の指摘から始め、情報科学や多変量解析、心理物理学的観点からの研究を紹介し、進化論からの説明やアフォーダンスからのデザインについても言及する。これらはいずれも、一義的には対象の特徴に視線を向けた研究である。第3章では、主体に焦点を当てた研究や理論を紹介する。Berlyne の行動主義モデルを出発点に、認知心理学における多様な理論や、感情に関わる現象に言及する。不快感情や、評価判断の個人差や文化差にも触れている。

第4章では色と形状の好みに関し、日常生活から芸術作品までを対象に古典的研究から最新の研究までを紹介し、嗜好が生理学的側面と文化社会的側面のいずれによっても決まることを指摘する。普遍性を求めるモデルや理論を示すとともに、性差や発達差、文化差にも言及する。

第5章では人は何を手がかりに、どのような情報処理に基づいて、他者に魅力を感じ取るのかが問題にされる。この領域は社会心理学や非言語コミュニケーション研究、パーソナリティ心理学、進化心理学にも関わり、1990年代以降に急速に進展した領域である。最新の知見を盛り込み、生化学や脳科学の知見も含めて、対人認知の魅力に関する研究が網羅される。

第6章と第7章では美感の神経美学的基盤と、脳機能障害による美感の変化が語られる。前者では神経美学と言われる分野に関し、皮質での情報処理のあ

り方を、主に絵画を用いた研究によって確認する。聴覚美や時間軸での分析も紹介され、脳は美をどう感じるのかという研究の現在が示される。後者では脳機能障害による表現の変化を見ることで、脳の局所性と統合性が語られる。

第8章では美感の時間特性が扱われる。マイクロジェネシス研究による1秒以内の処理の特徴から、単純接触効果や流行、文化といった長い時間軸での美感の変遷までが狙上に載せられている。

本書は各章が少しずつ内容を重ねながら、カノンのように展開していき、最初から読まなければならないというものではない。関心のある章から読み始め、関連する章へ、あるいは基礎的な知見へと読み進んでいってもらえればよい。

美感に焦点を絞って書かれた実証科学の本はこれまで日本では刊行されてこなかった。企画から7年以上も経過したが、この間にも内容を更新し、新しい研究も含めた充実したものになったと思う。この本が、美感に関心のある心理学の研究者はもとより、脳科学や行動経済学、感性工学の研究者、あるいは、美学や芸術、デザインに関心をもつ人々、さらには広く人の心の問題に関心のある人々に届くことを願っている。

## おわりに

KM この本の特徴の1つは、単純化すれば知覚心理学、認知心理学、神経美学という異なる研究基盤をもつ三名の研究者が、同じテーマを繰り返し取り扱っている点にあると思っています。そのことを「はじめに」において、アメリカの実験美学者 Cutting が使った「カノン」という音楽用語で表現してみたのですが、たとえば黄金比を例にとると、第1章では Fechner 以来の研究や最近の追試が語られています。一方、第4章では具体的な対象やデザインとして採用された例が挙げられています。第5章では神経美学での研究例が紹介されています。読者は異なる立場の研究に触れることができ、重点の置き方の違いを感じることもできると思います。同じようなカノンは、さまざまところに現れています。

KY 「カノン」という表現は的を射ていると思います。それを1冊の書籍としてまとめるために、第1章「美感とは何か」では、美感について、aesthetic science という新しい実証科学の訳として「美感」をあてるという説明から本書が始まっています。美しさに限らず、魅力や不快感なども射程に入れることで、多様な研究群を取り上げました。このような取り上げ方は独特だと思うのですが、お二人はあらためてどのように感じておられますか？

KM 実験心理学や比較行動学では伝統的に、よさや美しさ、かわいらしさなどのポジティブ印象を扱ってきました。一方で、不快感や気持ち悪さなどのネガティブ印象や感情はあまり取り扱ってきませんでした。認知心理学や神経美学の進展に伴って、そうした負の側面も積極的に取り上げられるようになり、この本では、両方の印象や感情、また、両者が混じり合った魅力などを取り上げようとしたところ、それに該当する分かりやすい日本語がなかった。つまり、さまざまな印象評価や感情をひとくくりで表せる言葉がなかった。そこで、横澤先生から「美感」という言葉の提案をいただいたわけですが、この言葉だと、美しさといったポジティブ評価のみを対象とするような誤解を与えかねないので、そうではないことを示す必要がありました。

KY このような問題提起もいただき、再考してみたのですが、あまりネガティブな感情を強調した命名も、ここで取り扱いたい全貌を誤解されてしまうような気がしていました。

KM 確かにそうですね。結果的によかったと思っています。それと、「美感」という言葉には、aesthetic scienceの一端という位置づけも持っているということも説明しておきたいと思いました。aestheticは語源的には「知覚」や「感覚」の意味をもつ言葉ですが、伝統的に美的とか審美的と訳されてきました。近年、哲学の領域でも、美学(Aesthetics)を感覚学とか感性学と言い換える流れがあるのですが、心理学では、感覚や感性はすでに別の意味で使われていて、ここで扱う内容を示すには適当ではない。といって、この本では単に何が美しいかという表面的なデータにとどまらず、その背後にある知覚や認知のメカニズムやプロセスを考える立場から書いていることを示したいと思ったので、アイステーシスにまで遡って説明してみました。

KY 結果的には、歴史的経緯と隣接分野との差異などを明確にさせていただいたように感じています。

KM これまでこうした領域に対応する言葉がなかったということは、研究領域が明確に存在していなかったともいえるわけで、今回、統合的認知とか包括的知覚といった観点で、「美感」を取り上げることで、研究領域の明確化や枠組みを与えた点でも、意義があったように思います。用語として定着するかどうかはこれからですが。

HK 今回の執筆では十分にまとめることができませんでしたが、神経美学についても、神経生物学や神経科学を背景としている研究者と心理学を背景としている研究者がいるので、実は研究の枠組みや問題意識が異なり、扱っている概念や最近の研究展開の方向性は異なっているように思います。神経系の研究者の目的はやはり「脳」を理解することなので、これまでの実験美学的なアプローチについてはほとんど知らないという方も多いですね。今回、「美感」という用語によって、従来の心理学的アプローチから神経科学的アプローチまで包括的に捉えることができたことは有意義でした。

KY 第2章「対象からのアプローチ」と第3章「主体からのアプローチ」は、対をなす章ですが、従来の心理物理学、ゲシュタルト心理学、行動主義心理学、生態学的心理学、認知心理学など、これまでの心理学の流れの中で、本書で扱うような美感に関わる研究が行われてきた歴史が明らかになりました。



心理学において、これまでも美しくは美しさを実証的に扱ってきたとしても、美感に関する個人差、文化差をどのように扱うかは難しい問題だったはずですよ。

KM 美しさやよさの実証研究は、基本的には、普遍性を見出そうとして行われてきたと思うのです。一方、好みや面白さについては、「蓼食う虫も好きずき」と言うように、個人差や文化差、時代差があるのも事実です。個人差や文化差には、個人の経験や記憶、関心や流通量（接触頻度）が大きく関わってきますが、そうした心の働きや影響に関して積極的に考察してきたのは認知心理学や経験主義の知覚心理学だったと思います。その意味で、普遍性と個人差を考える上では、知覚心理学や認知心理学の発想や知見がヒントになるのではないかと考えています。従来の性格心理学からの個人差とは異なる指摘ができるのではないかと考えています。

個人差と普遍性という話題については、川畑先生とZeki先生の研究において、何を美しいと思うかはそれぞれ人によって異なるけれども、美しく感じる際に反応する脳の部位は共通している、というのは面白いと思います。

HK 私たちの試みは美感の脳神経科学的基盤の理解だったので、当時は美的経験の個人差や好みの違いは当然ながら前提としながらも、その共通メカニズムとしての脳の働きを捉えるという問題意識がありました。問題の出発点としてはたとえばカント哲学的なものが挙げられます。「この薔薇が美しい」というときに感じ方は人それぞれの主観的経験に異なるけれども、他人もまた美しいと感じているに違いないとするとときに、その普遍的妥当性や条件とは何か、という問題を、美的判断と相関する特定の脳の活動性を示すことで、その部分が活動が強くなっていることが美的判断の条件だということによって答えなかったという論理がそこにあったわけです。ただ今では、私個人としては、美感の個人差、程度の個人差や個人内でのばらつきの個人差、さらには文化差の問題にとっても惹かれています。その点で色や形の嗜好というのは、個人差の問題にアプローチできる格好の材料かと思っています。

KY 第4章「色と形の嗜好」では、美感というより、好悪の感情を扱っています。好悪の感情も美感を形成する要因になることが他の章でも触れられています。ただ、なぜそのような感情が生まれるのかを行動実験から実証的に示す試みは、結局のところ脳内の知識ネットワークとの関係を明らかにすることになるので、神経美学とも親和性が高いのではないかと考えていますが、

いかがでしょう。

HK とても関心があります。好悪の感情の問題の捉え方には、2つの側面があるように思います。1つは生物学的な接近回避行動を促したり制御したりするもので、進化的基盤を持ち、個人差が比較的小さいものかと思います。脳の働きとの対応では、たとえば扁桃体や線条体の働きと関係があります。もう1つは、経験によって獲得され、脳の知識ネットワークとの関係が想定されますね。もともと私は知覚発達の研究から心理学のキャリアをスタートさせましたので、発達の側面としての「色と形の嗜好」に興味を持っています。今2歳の娘がいますが、様々な色や形の名前を取り憑かれたように連呼しています。

KM 美感というと、知識や知性の問題ではなく、感性とか感情の問題だという風に、「知」と「感」を二分して捉える方がおられます。そうではなく、知性も感性の一部とも捉えられるし、感性判断のかなりの部分は知識に基づいている。もちろん、本能や既存の知識以外のものに基づく判断や表現もあるのですが、いずれにしても「知」と「感」を対立するものとして捉える必要はない。一方、発達に関していえば、この本では「美感の発達」として1章にまとめることはしませんでした。複数の章で発達研究が紹介されています。知覚や知性の発達研究なみに、美感の発達研究に関して整理が進むと、「知」と「感」の関係性というか、トータルとしての人間の発達がより明らかになると思います。

KY 第5章「対人魅力と美感」では、対人魅力という、見るものの主観的意識の中にこそ存在する美を扱う章になっていますが、その一方「美しさ」と「かわいさ」を明確に区別しているように思います。赤ちゃんはかわいいのであって、美しさとは異なるというのが一般的にはわかりやすい例となるのでしょうか。このとき、「魅力」というのは両者に当てはまる指標となるのですが、この「魅力」と「美感」の関係について、どのように考えればよいのでしょうか？

KM 個人的には「魅力」は背反感情を伴う印象や感情ではないかと思っています。美しいけれど怖いとか、怖いけど見たい、あるいは、かわいけれど不気味とか、不快だけれど惹きつけられる、といった矛盾する感情が並存している場合を言うのではないかと思うのです。ポジティブな側面とネガティブな側面が同時に存在する、もしくはその結果、制御しがたい圧倒的な力が

生まれる、魅力とはそういうものではないかと思っています。

その点で面白いのが、川畑先生と Zeki 先生の研究で、美しさと醜さを感じる領域が異なるという指摘です。同じ領域が正と負の反応をとるのではなく、異なる領域で正と負を感じるという点です。ポジティブな評価をしつつ、逃げだしたいという場合、異なる脳内部位（前頭眼窩野と運動野）が同時に働くのでしょうか？ それとも、統合した形で、前頭眼窩野だけに反応が現れるのでしょうか？

HK 現代アートをはじめとして、美と醜とが同居するような経験はよくあることですね。この問題について明らかにしようとしたのが、経頭蓋直流刺激法（tDCS）を用いた研究でした。抽象画のセットを評価した後、tDCS で前頭前野と運動野を刺激して、再び絵画を評価させました。そのとき、前頭部の活動性を促進するようにした群と抑制した群と、プラシーボの群とでどのように評価が変化するかを捉えたのですが、美しさと醜さをべつの次元で評価させたのです。そうすると、前頭部を抑制的にした場合に、美しさの評価が低下して、醜さの評価には影響がないことが示されました。つまり、美と醜とは独立したメカニズムではないかと想定されるのではないかと思います。

KM 面白いですね。美醜以外の美感についても、心理学的研究と脳科学的研究の連携で理解がさらに深まるといいですね。

KY 第6章「美感の神経美学的基礎」では、産声をあげたばかりの分野という説明がありますが、すでに非常に大きな進展があったことが明らかですね。そこで、あらためて確認してみたいのですが、行動指標として様々な美的評価基準があったとして、それら複数の指標、たとえば「美しさ」、「かわいさ」、「魅力的」と共起する重要な脳部位1つだけあったとすると、実はその部位単独での寄与でそれぞれの美的評価基準が決まっているわけではないこと、すなわち統合的認知によって我々の美感が形成されていることを示していることになるのでしょうか？

HK 報酬系という脳内ネットワークの中でも何をどのように評価するかで活動の場所は異なっています。単独部位での寄与は必要条件の1つに過ぎず、やはりネットワーク中の様々な活動の統合的働きが重要になるということだと思います。

KM 基本的なことになるのですが、脳科学のデータを見る際には、「どこが」

といった部位の結果に注目するだけでなく、そのデータがどのような方法論や課題に基づいて得られたかにも注意を向けてほしいと思います。たとえば、美と醜のfMRI研究では、美にも醜にも反応した部位は相殺されて、反応部位として現れてこないとか、刺激を見て美しいなと感じている場合と、美しいかどうかを判断させた場合では、反応する脳部位が違ってくるとか。ネットワークという観点からは、時間軸にも注目してほしいですね。

KY 第7章「美感と脳機能障害」では、鑑賞者側と表現者側における美感の問題を明らかにしていただいたように思うのですが、健常者に対してもっと鑑賞者側と表現者側それぞれに立ってみて研究を進めるべきでしょうか？

HK そう思います。ただ表現者研究は非常に少ないですね。創造性研究についても認知的創造性、特に創造的思考については研究は多いですが、芸術的創造性についてはこれからの研究だと思います。特に脳研究は数少ないという印象です。

KM 心理学的研究に限って言えば、方法論の問題もあるように思います。鑑賞者の「印象」や「評価」を定量的に測定したり、分析したりする方法論はかなり確立されていますが、「表現」を分析する方法論はまだまだ少なかったり、未熟だったりする。また、表現者側に立った場合、制作の意図や制作者の技術、選んだスタイルや媒体など、多様な視点が関わってくるかもしれません。何を明らかにしたいか、そのためには何を上げるべきかを、研究者が明確にして、的確なアプローチをとる必要があります。

KY 第8章「美感研究の時間軸」では、注意やジスト、感情プライミング、単純接触効果など、従来の認知心理学で扱ってきた研究例が数多く紹介されていますが、それらの現象と時間軸を揃えながら美感を検討することの重要性について、どのように考えればよいでしょう。これからも、知覚、注意、記憶など認知心理学における典型的な機能とそれぞれ関連付けて美感を多面的に検討していくことになるのでしょうか？

KM 美感研究と従来の知覚や注意、記憶といった基礎研究——こちらは膨大な知見があるわけですが——をつなげるには、「時間軸」は1つの切り口になると思っています。美感の心的過程あるいは脳内過程を考えようとすれば、時間軸は必然的に入ってくると思うのです。

もともと、美感の時間軸に興味をもったきっかけの1つは、快さや美しさ、好みといった多様な印象が、異なる時間軸で発現することを示唆するデータ

を得たことでした。そのことは、個々の美感の発生機序を考えるヒントになるかなと。ただし、直列的な処理モデルだけで理解しようとするのは危ない。処理は並列的にも進むし、再帰的なプロセスもあるでしょう。また、超短時間から長時間までさまざまな時間のスパンが関与するので、そうした点は留意しておく必要があるでしょう。

HK 私の共同研究者でもありますウィーン大学の Leder 教授は、美感に関する認知的プロセスモデルを示し、よく引用されています。彼のモデルもそうですが、この数年でかなりのプロセスモデルが様々な研究者から示されてくるようになりましたね。脳内過程を想定したモデルも紹介されてきています。プロセスモデルが示すのは、時間軸上での心的過程としての美感であり、また様々な要因を包括した統合的認知としての美感だと思えます。様々なエビデンスを事細かく対応付けることが求められますが、実験室場面から日常場面までに適用可能なモデルを日本発で示したいですね。

KM 本書では第3章でも Leder のモデルをごく簡単に紹介しましたが、このモデルはこれまでに輩出されてきた多様な知見を、時間軸を入れることで、うまく整理していると思えました。ただ、人の脳の中で実際にそういう過程を経て反応が行われているかについては今後の吟味が必要です。先ほど話題に出た知識ネットワークとの関係も、その中で検討されていくと思います。したがって、最終的なモデルは、美感のモデルというより、人の心の活動全般を説明できるモデルになるのではないのでしょうか。出発点は美感であっても、1つの統合的な認知モデルになると思います。ただ、そのモデルが認知心理学の勃興期に示されたようなボックスモデルを精緻化しただけのものだとつまらない。人の論理のあり方を整理したものではなく、実際に人が行っていることを反映したモデルになってほしいです。

KY 本書が、美感というキーワードを元に、感と知が統合された、人の心の活動全般の精緻な認知モデルへ繋がるきっかけになってほしいと願っています。